

三重大学文学部文化学科『人文論叢』第四二号 別冊
二〇二五年三月発行

予祝の海浜——『齋宮良子内親王貝合日記』の和歌表現——

亀
田
夕
佳

予祝の海浜——『齋宮良子内親王貝合日記』の和歌表現——

亀田 夕佳

【要旨】

『齋宮良子内親王貝合日記』は、齋宮良子内親王のために催された貝合行事の記録であるが、ここで詠まれた和歌は、海浜の伊勢独自の表現展開を見ることが出来る。地方都市伊勢において、独自の文化が育まれているのである。本論では具体的に「長浜」と「二見浦」の読みふりを考察し、この作品の和歌表現が、類型的な和歌表現を基盤にし「貝合」の行事に合わせて「予祝」の意が込められたものにアレンジされていることを考察し、伊勢齋宮における「人々の手作り感」満載の行事であったことを述べる。

一、はじめに

『齋宮良子内親王貝合日記』は、十二歳の齋王のために、人々が「チム齋宮」といえるほどの団結力で心を尽くし趣向を凝らした催しであった。拙稿では、この場で詠まれる「貝」がすべて「かひあり」とされ、「かひなし」の形を一首も取らないことを指摘し、披露された和歌が齋宮にエールを贈るようにして詠まれたことを述べた¹⁾。献上された州浜には、色とりどりの貝だけでなく、齋宮を支える地域の人々までもが「貝細工」として飾られており、伊勢の海浜をあたかも「ドールハウス」のように仕立て、齋宮良子内親王へ贈ったものであったのである。本作品には、齋宮良子内親王に対する伊勢齋宮の人々の心尽くしを見ることががで

きるが、本論では「長浜」及び「二見浦」を取り上げて、和歌表現の在り方を考え、改めて本作品の表現としての達成を明らかにしたい。

二、日記部分における「長浜」「二見浦」について

『齋宮良子内親王貝合日記』は、多くの歌合日記と同様に、前半が日記部分、後半に歌合部分が配されており、伊勢の海浜がさまざまに登場している²⁾。その中でも「長浜」と「二見浦」は、次に示すように繰り返し言及される海浜である。次に該当する箇所を日記部分から引用する³⁾。

(A) 春のつれづれは、都にてだに海人のしわざゆかしがりし人々なれば、浦々に出て貝を拾ひつつ持て参り集まるを、御前には世に知らずをかきものに選りあそばせ給ふを、同じくは貝合をして珍しからん一つにても持て参りたらむを勝にせむなどいひて、男女方分きて五月五日庚申に持て参らんと定めさせたために、所がらあやしき人々の心のうちにすさまじう思ふべかめれど、さすがに我も劣らじと浦々に漁をし、男女老いたる若き出でて数を選りまさむと挑み交はして、御前には二見の浦移したらん心地して、色々様々の貝散り敷きたるはこよなきつれづれの慰めにて、三、四月も過ぎぬ。

(B) 右、櫛の箱と思しき一双に絵描きて掛籠の上に銀の海して蓬菜の

山を作りて童男下女の舟を浮けたり。傍の方に長浜を作りて、掛籠のかたには本文かたをゑりて野貝を入れたり。いま一つも銀の同じ海、二見の浦しろらの浜に舟人行きちがひたるを、をろしたも同じさまにて色々の貝を入れたり。一つは参らせたる州浜のうちに、山のあなた浦は小浜に波の荒く寄りたり。こなた浦には人々多く群れて貝を手毎に拾ひたり。又ある州浜には、葦原に鶴を据ゑたるを台にて上に羅張りたる折敷一双には、箱の羅、海にて錦と見ゆ。いま一つには、藤懸かりたる藤かたなり。州浜の上に貝どもあり。

(C) 左大きな蛤の蓋覆ひなるを作りて、開けたれば雲母を海にて彩りて、上に波の文を敷きたる。まことに野海の心ちしてかけみたり。中は遙々とある海にて、巡りを長浜しろらの浜にて、下を彫りて、色々の貝を入れたり。箱の上の州浜もやがてその内々貝を入れたり。浦々磯々の潜きし綱引き楫人舟人行きちがひたる。同じさまなれば詳しく書かず。その心同じう見えぬべし。又蝙蝠の扇のかたをして、その扇の絵に二見の浦のかたを彫りて、その心に同じ色の貝を入れたり。

(A) は作品冒頭である。ここでは「春のつれづれ」に都では実際に見たことのなかった「浦々」で人々が貝を拾い集め、内親王にお見せしたところ、「よに知らずをかしきもの」としてさまざまに貝を選んだことが語られ、そうした内親王の様子を契機として貝合が企画されたときとされている。五月五日の庚申に向けて⁴「男女老いたる若き」とされるように、齋宮の人々が総動員で美しい貝を集めたところ、御前には色とりどりの貝が敷き詰められたという。ここで皆の心尽くしの貝が集められた様が「二見の浦」が内親王の前に移されたようであったと記されている。

(B) (C) は、貝合当日に奉られた州浜の様子である。右方の(B)

では「長浜／二見の浦／しろらの浜／小浜／藤方」が、左方の(C)では「長浜／しろらの浜／二見の浦」といった海浜がさまざまな貝によって象られている。

原瑠璃彦志は歌合に用いられた州浜台を取り上げ「天皇が自国の風景を掌握することを視覚的・立体的に演出する装置でもあったといえよう」とされ、「州浜台とは、和歌が「上演」されるとともに、天皇に捧げられる器であった。」と指摘する⁵。右に示した州浜には伊勢の海浜の風景が色とりどりの貝で象られており、齋宮周辺の地域を海からのめぐみ豊かなものとして演出し、内親王に捧げるものであったといえるだろう。加えて、後にも触れるが、(B)では「舟人行きちがひたる」、「人々多く群れて貝を手毎に拾ひたり」、(C)では「浦々磯々の潜きし綱引き楫人舟人多く行きちがひたる」とあるように、この歌合の州浜には「齋宮の人々」が数多く作りこまれている。土地を支える多くの人々を盛り込んだ形で齋宮に届けられた点を、他の歌合の州浜の違いとして指摘しておきたい⁶。

三、「長浜」の和歌

では、和歌における表現を考察してゆく。はじめに「長浜」を取り上げる。「長浜」は歌合部分の和歌では以下の二首に詠まれており、それぞれに「貝」を詠みこむ点が、典型的な「長浜」の詠みぶりにはない表現として指摘できる。

長浜

(a) 君がよのためしと見ゆる長浜に千種の貝の数も知られず (二)

(b) 神代よりいひはじめける長浜のいけるかひをば君や拾はむ

(二二)

(a) (b) 両首とも、「君」「世／代」を詠みこみ、そこに「貝」を配している。本作品の「長浜」については、以下のように「未詳」の地名であるとされている。『平安朝歌合大成』の解説と『歌ことば歌枕大辞典』を示す。

○『平安朝歌合大成』

北牟婁郡二色郷に「長浦」という土地があるが、これが長浜に当るのであろうか。錦浦の西隣の湾である。或いは伊勢の阿漕の浦から四日市方面にかけての長い平坦な海岸を長浜といったのであろうか。不詳⁷⁾。

○『歌ことば歌枕大辞典』「長浜」

現在地は未詳。『古今集』神遊びの歌「君が世は限りもあらじ長浜の真砂の数はよみつくすとも」(二〇八五)は、左注に光孝朝の大嘗会の伊勢国の歌とある。〈中略〉「長浜」といえば前掲の古今集を承けて、伊勢の長浜が最も知られていたと思われる。〈中略〉「長・永」を掛詞にし、松・真砂・鶴などを詠み込んで、賀の歌に多く詠まれる⁸⁾。

萩谷氏は「未詳」、『歌ことば歌枕大辞典』では「現在地は未詳」とさされているように、「長浜」は具体的にどこであるのかははっきりとしなが、『枕草子』「浜は」には「浜は有度浜。長浜。吹上の浜。打出の浜。もうよせの浜。千里の浜。ひろう思ひやらる。(三三四頁)」とあり、海浜の代表格として知られていたと考えられるだろう。万葉集では以下のように詠まれている。(ア) (エ) として示す⁹⁾。

天皇の報和へ賜ふ御歌一首

(ア) 大の浦の その長浜に 寄する波 ゆたけき君を おもふこの

ころ 大の浦は遠江国の海浜の名なり (巻第八、一六一五)

(イ) 豊国の 企救の長浜 行き暮らし 日の暮れゆけば 妹をしぞ思ふ (巻第十二、三三二九)

布勢の水海に遊覧する賦一首 併せて短歌

この海は射水郡の旧江村にあり

(ウ) もののふの 八十伴の緒の 思ふどち 心遣らむと 馬並めて
うちくちぶりの 白波の 荒磯によする 渋谿の 崎たもとほ
り 松田江の 長浜過ぎて 宇奈比川 清き瀬ごとに 鵜川立
ち か行きかく行き 見つれども そこに飽かにと 布勢の海
に 船うけすゑて (巻第十七、三九九一)

珠洲郡より船出し、太沼郡に還る時に、長浜の浦に泊り、
月の光を仰ぎ見て作る歌一首

(エ) 珠洲の海に 朝開きして 漕ぎ来れば 長浜の浦に 月照りに
けり (巻第十七、四〇二九)

(ア) は「遠江守桜井王、天皇に奉る歌一首」への返歌として詠まれたものである。左注にもあるようにここでの「遠江の大の浦」として静岡県海浜を指している。『万葉集』においては、(イ) では「豊国(九州)」、(ウ) では「布勢(富山県)」、(エ) では「珠洲(石川県)」というように、それぞれの地域での「長浜」とされ、海浜の括がりが「長さ」として認識された表現となっている。

万葉集においては「長浜」は地名であり「長／永」の掛詞としては用いられていないが、(ア)「寄する波ゆたけき君」は繰り返しゆつたりと波が打ち寄せる浜として詠まれており、その「ゆたけき」様子に、臣下である桜井王に対するゆるぎない「信頼の表明」がなされているとされ

る⁽⁸⁾。(イ)「行き暮らし」についても、暮れるまで歩き続ける時間と連続するのが「長浜」であり、一瞬の限定的な時間や空間をいうものではない。「永遠に続くような継続性」や「果てしない拡がり」をいう点に「長／永」の萌芽を見ることができよう。

では平安時代の用例はどのようなであろうか。「長浜」を詠んだ和歌から、『齋宮良子内親王日記』より以前の成立とされる七首(オ)～(コ)として次に示す。

(オ) 君が代は限りもあらじ長浜の真砂の数はよみつくすとも

これは、仁和の御への伊勢の国の歌

(古今集、卷第二十、神遊びの歌、一〇八五)

忍びて通ひ侍りける人、今帰りてなど頼めおきて、公の使に伊勢の国にまかりて、帰りまうで来て、久しうとはず侍りければ

人はかる心の隅はきたなくて清き渚をいかで過ぎけむ返し

兼輔朝臣

(カ) 誰がために我が命を長浜の浦にやどりをしつつかはこし

(後撰集、卷第十三、恋五、九五四～九四五)

天喜四年皇后宮の歌合に、祝の心をよませ給ける

後冷泉院御製

(キ) 長浜のまさこの数も何ならずつきせずみゆる君がみ代かな

(金葉集、卷第五、賀部、三三二)

鈴鹿山

音に聞く伊勢の鈴鹿の山川のはやくよりわが恋ひわたる君

円方

梓弓いる円方に満つ潮のひるはありがたみよるをこそ待て

あじろの浜

潮満てば入江の水もふかやまのあじろの浜に寄れる沖つ浪

うはせ川

うはせ川したの心も知らなくに深くも人の頼まるるかな

はりかは

唐衣縫ふはりかはの青柳の糸抛り掛くる春や見に来む

わたらひ

玉匣二見の浦にすむあまのわたらひぐさはみるめなりけり

御津

ことさらに我は見つらむ小笹原さして問ふべき人はなくとも

浮島

いざやまたこの浮島にとまりなむ

沈みつつのみ世を経れば憂し

ながはま

(ク) 長浜にゐてしほたるほととぎす五月ばかりはあまにざりける

此十首は、延喜十六年四月廿二日、わたくしごとにつきて

伊勢のさい宮にまかりたるとき、すなはち寮頭国中をつか

ひにて、国々の所々名を題してよませたまふ野望歌等

(躬恒集、一六六)

ながはま

(ケ) とまりつつむまやむまやと思ふまにゆけどつきせぬ道の長浜

(高遠集、一九八)

(コ) 君がよのつくべくもあらぬ長浜にいとどもおふる松の千代かな

(輔親集、二〇六)

右は、「長浜」を詠みこんだ歌のうち、『齋宮良子内親王貝合日記』以

前に成立したとされる六首について示した。(オ)の古今集の左注に「伊勢の国の歌」とされるのをはじめとして、(カ)後撰集の兼輔歌も「伊勢の国」、(ク)躬恒集も「伊勢」ということが明示されている。また、『万葉集』で見られたような「継続性」や「拡がり」は、(オ)「君が代は限りもあらじ」、(キ)「つぎせず見ゆる」、(ケ)「ゆけどつぎせぬ」、(コ)「君が代のつくべくもあらぬ」にも認められ、「長・永」の意が、(カ)「命を長浜」、(ケ)「道の長浜」のように掛詞として詠まれている。さて、ここまで「長浜」がどのように詠まれているのかを確認してきた。改めて『齋宮良子内親王貝合日記』における「長浜」の歌を示す。

長浜

(a) 君がよのためしと見ゆる長浜に千種の貝の数も知られず (二)

(b) 神代よりいひはじめける長浜のいけるかひをば君や拾はむ

(二二)

「長浜の真砂」は(オ)(キ)に詠まれており、その数の多さも「君が代」には及ばないとされていたが、(a)では「長浜」の「千種の貝」は「君が代」と「長浜」を介して連続し、共に「数も知られず」とされ、限らないものとして表現されている。数えきれないほどの貝とは、豊かな伊勢の海の恵みを寿ぐ詠みぶりであり、それが貝合を主催した良子内親王の徳として「ためし」とされているのである。

「長浜」と「貝／かひ」を結び付けたのは、本作品が初期であると考えられるが、古今集で詠まれていたように、「長浜」は「真砂」の数の多さと結びつけられる特性がある海浜だといえる。『齋宮良子内親王貝合日記』では、その「真砂」を(a)では「千種の貝」、(b)では「いけるかひ」として、「貝」を詠みこんだ点が表現の工夫だといえよう。

ここには、「貝」に「生きがい」を重ねて、「春のつれづれ」を過ごしていた良子内親王に、土地の素晴らしさを伝える意図が含まれていたと考えることができるのではないだろうか。

四、「二見浦」の和歌

続けて「二見浦」の和歌について考察してゆく。『齋宮良子内親王貝合日記』において、「二見浦」が詠まれるのは次の二首である。

二見の浦

(c) 唐錦波のかげこそ打ち寄せて今日やふたみの貝を拾はむ (四)

二見の浦

(d) かちまけんかひやいづれと明け暮れは二見の浦にあさりをぞする (二八)

「二見浦」の和歌についても、「長浜」と同様に、「貝」と共に詠まれるのは、本作品が初期だと考えられる。即ち「二見浦」においても、それまでの類想的な歌ことばの世界に、「貝合」の行事にふさわしい独自のアレンジが加えられているのである。「二見浦」について、『歌ことば歌枕大辞典』「二見の浦」では次のように説明されている。

二見の浦は「浦」に関連させて「波」「寄る」さらに「寄る」の縁で「夜」「月」、貝の名所ということで「貝」が詠みこまれることが多い。また、「二見」を「蓋」「身」に掛け、蓋の縁で枕詞「玉匣」を冠したり、「鏡」を詠みこんだり、「開ける」「見る」を縁語として用いることも多い。そして、「開ける」に「夜が明ける」を掛け、明け方の情景、特に月を詠み込む傾向が新古今時代には顕著になってくる¹¹⁾。

「貝の名所」として定着するのは、『齋宮良子内親王貝合日記』からだと考えられるが、「二見浦」の表現が登場するのは『古今集』以降である。『万葉集』では「ふたみ／二見」として次の用例のみに詠まれている¹²⁾。

高市連黒人が羈旅の歌八首

(サ) 妹も我も 一つなれかも 三河なる 二見の道ゆ 別れかねつる

一本に云はく、「三河の 二見の道ゆ 別れなば 我が背も我も ひとりかも行かむ」 (巻第三、二七六)

右の「二見の道」が具体的にどの地のことをいうのかは、定説を見ないが、「一つなれかも／三河なる／二見の道」にあるように、「数字の一・二・三を詠みこんだ遊戯性の濃い歌¹³⁾」である。「二見の道」は二方向に分かれる岐路をいうものであるが、そこには別れがたく振り返り見返してしまふ気持ちが込められているであろう。このように「二見」が「見る」を内在する歌ことばであることは次に示す『後撰集』の歌にも見ることができ。また「三河の二見」として「二見山」が次のように詠まれている。

しもつけにまかりける女に、鏡にそへてつかはしける

よみ人しらず

(シ) 「二見山ともにこえねどます鏡そこなる影をたぐへてぞやる

(後撰集、巻第十九、離別、一三〇七)

別れに際して「鏡」に添えた歌である。ともに行くことはできないが、自らの姿を映した鏡を贈るのである。「二見」には、自分が見た鏡を再び見るようにと「見る」ことを言い込めた表現なのだといえよう。続けて「二見浦」の和歌を確認してゆく。(ス) (ト)として示すのは、『齋宮良子内親王歌合日記』以前の成立とされる歌集に収められている八首

である。

但馬の国の湯へまかりける時に、二見の浦といふ所に泊まりて夕さりの乾飯たうべけるに、伴にありける人人の歌よみけるついでに詠める
藤原兼輔

(ス) 夕月夜おぼつかなきを玉匣ふたみの浦は明けてこそ見ぬ

(古今集、巻九、羈旅歌、四一七)

わたらひ

(セ) 玉匣ふたみの浦にすむあまのわたらひぐさはみるめなりけり

(躬恒集、一六三)

(ソ) 冬はみつ二見の浦のあさごほりとけぬほどこそ鏡なりけれ

(恵慶集、二二七)

格子のつらにより明かしたるあしたに、同じ人に

(タ) あげがたきふたみの浦によるなみの袖のみ濡れつ沖つ島人

(実方集、一二二)

この御手本いるべき、葦手をぬひものにすべしと
せめらるれば

(チ) たまくしげふたみの浦の中におつるたきの影こそ鏡なりけれ

(ツ) いづこそやふたみの浦のありといひし心をいれてとはましものを

(重之集、四一／四二)

(テ) しもさゆる二見の浦のをしのうへを君よりほかに誰かはらはん

(小大君集、一三六)

ふたみの浦にて

(ト) たまくしげあけてみつれど朝ぼらけふたみの浦は猶波ぞよる

(大式高遠集、二二三)

右に示したように、「玉匣」とともに詠まれるのは(ス)(セ)(チ)(ト)

である。『古今集』以来「二見」が「蓋・身」として「開く」との連想のもとに用いられていることがわかる。「開く」との連想については、(タ)『実方集』においても「あけがたき」として、格子も上げてもらえずに外側で夜を明かして涙を流したのだということを袖の濡れた島人によそえて歌にしている。「玉匣／蓋・身／開く」の連想を、「二見浦」に重ねることの表現効果については、(ス)の兼輔の和歌について「秘蔵の玉くしげの蓋と身を開ける、そのように二見の浦の天地が明けるというふう」に、二見の浦に美しい夜明けのイメージを与える」と指摘されている。「二見の浦」は「開けられる匣」とされることによって、ほのぼのと明るい夜明けのイメージを獲得したのだといえよう。

さて、先に(シ)『後撰集』において、「二見」と「鏡」の関係に触れたが、「玉匣」の連想からも「鏡」が登場している。(ソ)『恵慶集』では「あさごほり」が「鏡」とされている。また(チ)『重之集』では藤原佐理の手本を入れる匣をめぐって歌を詠む際に「鏡」を詠んでいる。

繰り返しになるが、「二見浦」の表現は、「蓋・身」そして「裏・うら」と掛詞とされることによって、「開く／明く」と強い結びつきを持つ。大切な宝箱が開けられることに、夜明けのほのぼのとした明るさが加わるのである。(ソ)『恵慶集』「あさごほり」、(ト)『高遠集』の「あさぼらけ」の柔らかな明るさは「二見浦」と分かちがたく結びついた特性だといえよう。

では改めて、本特品における「二見浦」の詠まれ方を取り上げておこう。以下に再掲する。

二見の浦

(C) 唐錦波のかげこそ打ち寄せて今日やふたみの貝を拾はむ (四)

二見の浦

(d) かちまけんかひやいづれと明け暮れは二見の浦にあさりをぞする (二八)

(C) では二見浦は「唐錦」に重ねられた「波のかげ」が打ち寄せられる浦とされている。華やかな貝合の儀式にふさわしい「きらきらした光」が詠み込まれ、「蓋」と「身」のある「貝」を導いている。(d) では、勝負を決する「生きがい」と「貝」を掛詞とし、その「かひ」を見つめるために一日中「あさり」をする場として二見浦が詠まれている。繰り返しになるが、「玉匣」や「鏡」と共に詠まれるのが通常であった「二見浦」は、本作品において「貝／かひ」と結び付けられ、その後に受け継がれてゆくことになる。

五、おわりに

さて、ここまで、『齋宮良子内親王貝合日記』における「長浜」と「二見浦」の描かれ方を取り上げ考察してきた。それぞれ、類型的な歌ことばの様に「貝／かひ」を詠み込み、新たな表現の地平を獲得するとともに、永遠に続く「長浜」や、明るい「二見浦」というように、実景を和歌や歌ことばの力で以てより良いものへと象ったものであることを読み取った。齋宮良子内親王に捧げられたのは、そのような心尽くしの言葉の贈り物であったのである。

日記部分において齋宮の人々が州浜に登場していることを述べたが、和歌においても、「拾ふ」や「あさる」の表現が多く詠まれることによって、人々の息遣いまでも持ち込むことに成功していると考えられる。以下示す。

二見の浦

唐錦波のかげこそ打ち寄せて今日やふたみの貝をひろはむ

浮島 (四)

あさりすと浮島めぐるあまびとはいづれの浦かとまりとはする

大淀 (七)

大淀によもの浦貝拾ひても千尋ばかりの菖蒲をぞ引く

あしはらに鶴たてる中にうらうつせ貝拾ふ (八)

たづさわぐあしのなしはをかき分けてうらうつ貝をあさりつるかな

浦人ごとに貝拾ひたり (九)

浦わかず八十の島人うちむれてひと所にも拾ふ貝かな

あらはに鶴立てる所にうらうつ貝 (一〇)

たづさわぐ葦のものはをかき分けてうらうつ貝をあさりつるかな

都貝 (一五)

ともすれば恋しきかたの名におつる都貝をぞまづ拾ひつる

右歌 (一六)

神代より言ひはじめける長浜のいける貝をば君や拾はん

大淀の浜に人のゐたる (二二)

いかにせん今日大淀の浜に来て菖蒲や引かむ貝や拾はん

二見の浦 (二四)

かちまけんかひやいづれと明け暮れは二見の浦にあさりをぞする

あはび貝をかづきと言ひけり (二八)

知らざりし千尋の浜に下り立ちて誰ゆゑとかはあさりをもする

伊勢の海は蛤をあざりと言ひけり (三五)

年経ともこのあまびともかばかりに貝あるをりのあざり見えきや

(三六)

志賀浜にて都貝拾ふ

見し人の恋しきことに都貝あざるとこしが浜までぞ行く (三九)

日記部分では献上された州浜に、伊勢齋宮の人々の姿が丁寧作りこ

まれていたことが語られていたが、同じように和歌においても人々の姿

が色濃く詠まれているといえる。特長的であるのは、それが「拾ふ」「あ

さる」といった、実際に海浜に下り立って貝を集める姿であることだ。

ここには、集められた「貝」が、海の恵みであることに留まらず、人々

がさまざまに伊勢の海浜から拾い集めてきた「生きがひ」であることが

語られている。

「長浜」と「二見浦」の詠みぶりに見たように、『齋宮良子内親王貝合

日記』で演出される海浜には、寿ぎの表現で満ちているが、そこに「貝

／生きがひ」を拾い集めた齋宮の人々の姿が数多く含まれている点が興

味深い。田中喜美春氏は「主催者の意図、あるいは、場に即して詠ずる

歌合という形式は、言ったことの具現という言葉について古く、深い

信仰ともかわって、祝宴にうってつけな方法であったのである。」と

され、平安初期において「祝言を表わす歌合が存在したのである。」と

指摘するが、そうした特性は、本歌合にも認めることができる。¹⁴⁾

『齋宮良子内親王日記』に描かれた「貝合」は、齋宮を支える人々が

それぞれに「貝／生きがひ」を持ち寄り、齋宮良子内親王に捧げた、心

尽くしの予祝の行事であったのだといえよう。

※本論は人文学部研究ユニット「齋宮文化研究ユニット」の成果の一部

である。

【注】

- 1 拙稿「寿ぎのドールハウス——『齋宮良子内親王貝合日記』の表現——」（『国文論叢』五七号、二〇二二年一月）。
- 2 本橋裕美氏は「齋宮の土地意識を形成するために、都人にも知られた歌枕が選ばれていく点は興味深い。」と指摘している（本橋裕美「文学サロンとしての齋宮空間——良子内親王を中心に——」、『学芸古典文学』第八号、二〇一五年三月）。
- 3 『齋宮良子内親王貝合日記』の本文および『万葉集』以外の和歌の引用は新編国歌大観により、『万葉集』『栄花物語』は『新編日本古典文学全集』による。私に表記を改めた箇所がある。和歌の検索には日本文学Web図書館「和歌データベース」（古典ライブラリー、二〇一五年一月）を用いた。
- 4 「五月五日庚申」とあるが、萩谷朴『平安朝歌合大成 新訂増補』（同朋舎出版、一九九五年）は「五月六日」の間違いであろうと指摘されている。
- 5 原瑠璃彦『州浜論』（作品社、二〇一三年、一一八頁）。
- 6 州浜には自然の景色が作りこまれるのが一般であり、そこに人物を配する例は『仁和四年——寛平三年秋 内裏菊合』『津の国の田蓑の島州浜に植ゑたる菊のしたに女袖を笠に着て貝拾ふかたしたり』という五番歌の詞書にみられる程度であり、希少だといえる。
- 7 萩谷朴『平安朝歌合大系 新訂増補』第二卷（同朋舎出版、一九九五年、一二七頁）。
- 8 久保田淳・馬場あきこ編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年、六二五頁）。
- 9 「長浜・長はま・なが浜・ながはま」で検索した結果、『齋宮良子内親王歌合』より前の成立とされるのは十首認められた。全ての歌を論文に示した。
- 10 多田一臣『万葉集全解』3（筑摩書房、二〇〇九年、二九六頁）。
- 11 前掲注7。七六二〜七六三頁。
- 12 「二見・二み・ふた見・ふたみ」で検索した。『齋宮良子内親王貝合日記』より前の成立とされるものは、十二首である。うち十一首は論文内で示した。取り上げなかった残り一首は「こひしなんそれもおなじなになににせん人め人事ふたみわがせん（古今六帖、第四帖こひ、二〇〇三）」である。
- 13 小島憲之・木下正俊・東野治之 校注・訳『万葉集』頭注（小学館新編日本古典文学全集、一九九四年、①一八三頁）。

- 14 田中喜美春「祝言の歌合——帯刀陣歌合・宣耀殿御息所歌合から——」（『岐阜大学教育学部研究報告——人文科学』二八号、一九八〇年、四一頁）。